

第6回救急・災害医療委員会会議記録

1. と き 令和7年3月25日（火）午後7時30分～9時
2. ところ 伊勢地区医師会館 3階講堂
3. 出席者 委員長 由井進太郎
副委員長 森田勝也
委 員 荒木 潤 梅田佳樹 榎村尚之 大西久司 大森教成 河口大介
岸 具弘 倉田正士 説田守道 田中民弥 堂本洋一 橋上 裕
畠中節夫 東谷光庸
会 長 山川伸隆
副会長 西山 敦 寺田 晃 徳田 敦
事務局職員

IV. 議事の経過の要領及びその結果

会議の冒頭、由井委員長があいさつをされ、これまでの委員会の経過の概略を説明し、協議に入った。

報告事項

(1) 経過報告

由井委員長が次のよう報告された。

急性期の対応、亜急性期の対応、救護所の位置確認、班編成等種々議論をいただいていた。第5回の委員会で班編成を了解いただき、救護所への概ねの出動態勢を整理してきたと考える。

その後各種の研修会、勉強会に出席させていただき、災害医療の現状・課題等を学んできた。災害医療は、いろいろな方法が議論され答えがない状況であり、日本医師会（JMAT）も再度検討を始めていると伺っている。

本日は、伊勢地区の災害医療について特に災害診療記録を中心に議論をいただく予定であり、よろしくお願いしたい。

(2) 令和6年度市立伊勢総合病院総合防災訓練について 【資料1】

由井委員長が、資料No.1に基づき次のよう報告された。

2月27日に開催された訓練に医師会から6名参加し、資料にある訓練実施計画に基づき勉強させていただいた。特にトリアージ等実践的な訓練の必要性を感じたところである。

報告事項

(3) 伊勢地区医師会の災害医療について

本日のテーマとして、災害診療記録について説明させていただき、先生方のご意見を伺いたい。

由井委員長が、「災害診療記録 2018」について重要なポイントについて説明された。特に、災害現場では担当医師が日々変わるため、患者情報を共有する重要な役割であり、「メディカル ID」の記載、情報の保管・管理等について説明され、意見を求めた。

○次のよう広範囲な意見交換が行われた。

- ・能登地震に派遣された先生が医療現場での経験を報告され、実際の運用上の課題等を説明された。
- ・混乱する現場で診療記録を誰が記入し、また、保管や情報の引き継ぎの困難さの説明がされた。
- ・医療現場における指示命令系統、また、情報の集約を行う立場は、県、市町、地元医師会、支援の救護班か様々な運用上の課題が提起された。
- ・急性期、亜急性期、その後と復旧が進むと医療現場もそれにつれて変化し、弾力的な対応がされる。
- ・地域の特性により、インフラの整備状況が大きな影響を及ぼす。
- ・救護所の設営、運営を具体的にどのようにするのか、医療現場をどのように整備していくのか、整理すべきことが多い。
- ・災害医療は県が中心であり、地域の保健所が地域の拠点となる。また、地元自治体も住民の生活を保障するため大きな役割を持っており、事前にコミュニケーションをとっておく必要がある。
- ・被災地では、初動は DMAT 等の救護活動が中心で、いくつかの引き継ぎを受けながら、最終的には地域の医師会が救護活動の中心となる場合が多い。
- ・災害救護は、医師だけでなくチームとしての活動が重要であり、医師会の事務担当者も災害救護の知識、情報等を得ておくことが必要ではないか。

- ・伊勢地区医師会として、今後どのように取り組むのかという質問に対し、山川会長が県、市等関係機関と医師会の役割を認識したうえで訓練等を積み重ね、また関係者の意思疎通を図り情報共有を進め、当地域の災害救護をレベルアップしたいと話された。

最後に由井委員長が次のよう話され、会議を終了した。

今後は、会員対象に①災害診療記録・J-SPEED の作成等における研修会、②トリアージ訓練の実施を検討し、また県、市、医師会の役割を整理し、災害救護の在り方を協議したいと抱負を述べられた。